

とで行われていた)に通わせ、長時間にわたってソルフェージュや課題曲をこなすことになる。発表会で家族や皆に褒められることが、音楽を演じる喜びの原体験となっている。

最初にオーラの素質を信じて両親を説得したのは、父ルイーダの親友の聖職者ジェローザで、その紹介でマエストロのラヴァッツィン先生に師事し、音楽の才能に磨きをかけることとなる。1959年(12歳)にオーラはヴェローナのリストリ劇場で初めてのコンクールを体験し、ディー・ジンベッリ(以下、ディーノ)と共に優勝を分かち合い、その日からE.N.A.L.(注:労働者救済国際協会)がプロモートするショーに出演するようになる。舞台上で歌うことの情熱が目覚めたオーラは、この頃から勉学との両立に苦しむこととなり、勉強面の遅れを乗り越える努力を続けている。好きな歌の道に進むことを父に許可して貰うために。



1963年夏(15歳)、オーラはテレビ番組グラン・プレミオ(意:大賞)のヴェネト州予選のためにRAIヴェネツィアのオーディションを受けている。その委員会のメンバーの中にいたバリトン歌手のジーノ・ベッキがオーラの両親にこう助言している。《この娘、いいですねえ。低音や中音の発声の基礎がしっかりできていますから。でも高音は無理に出さずに、話すように歌う習慣をつけてください。》

8月にRAIは、オーラを最終審査会場のミラノに招くことにしたが、運悪くオーラは両親とヴァカンスに出かけていて、その知らせをラヴァッツィン先生が代理人として応対。オーラ一家は急遽父の車でミラノへ向かったが、フィアット600では時速90km以上のスピードが出せず、会場入りした時刻には、審査委員会は既に解散してしまっていた。例外としてオーラはテストを受けさせてもらうことが出来たのだが、委員の誰かが「彼女は歯がデカイ」と言ったため落選してしまった。

オーラに野心があるとしたら、「一回でいいからテレビに出て見たい」ということだけだった。故にラヴァッツィン先生の助言を受けて、カストロカーロ・コンクールに参加する同意を両親から得ることにしたそうだ。しかし実はこのコンクールへの参加を強く望んでいたのは、むしろ父ルイーダだったと言われている。小さい頃

から芸能界に身を置く方法を探していた娘の味方だったのだ。

カストロカーロは、ジャンニ・ラヴェーラが考案し新人歌手たちの登竜門となったコンクールで、優勝者2名がサンレモ音楽祭へ行くことになっていた。このコンクールでオーラは約4,000人の参加者の中から、128人の予選通過、10人のファイナリストと勝ち抜き、9月22日の最終審査で第14回サンレモ音楽祭行きの2



席を争うことになった。このカストロカーロでは、新人歌手を紹介する父親役・母親役をベテラン歌手たちが務めたのだが、オーラの父親役を務めたのがジョルジョ・ガーベルだった。ガーベルはオーラにこのような言葉をかけて勇気づけたそうだ。《君に僕の歌「夜の道(Le strade di notte)」を託すよ! ジリオラ、その歌の面倒をちゃんと見てくれ、君の手の中にあるのだから! というより君の喉にと言った方がいいかな!》

もちろん当時のオーラは全くの無名で、他の父親役やゲスト出演の大手歌手、トニー・レニス、ペトゥラ・クラークやフランス人女性歌手フランソワーズ・アルディを目の前にして足が震えるほど緊張したそうだが、ひとたびステージに登場してしまえば、ガーベルがオーラを信頼して微笑んでいるのが見えて自信を取り戻したと語っている。オーラが最終日に披露したのは「夜の道」と「水の上(Sull'acqua)」というデリケートな2曲で、ブルーノ・フィリッピーニと優勝を分かち合うこととなった。

デビュー曲となったのは「瞳にいっぱいの涙(Penso alle cose perdute/意:失ったものを想う)」。オーラの内面を描写したかのような歌で、生まれ育った町を歩くと、子供の頃の遊びや低学年の頃、あの頃の無垢な友情に戻れたら、と思うことがあるそうだ。B面になった「淋しいめざめ(Quando vedo che tutti si amano)」で歌われる甘くも悲しい気持ちは、自分の歌に重要なエッセンスになっていて自分好みの歌だと語っている。自分の持ち歌は、幸運なことにも等身大の自分を映しだしたもののばかりで、歌っていると奥底